

坂の上の星雲^{せいうん}

西郷 西盛

第一章 黎明編

第四話 空間騎兵

三浦半島の最南端に位置する城ヶ島。ここは古くから、うみうが息をする自然と歴史の宝庫で身近なリゾート地として愛されていた。青い海や入り組んだ湾など自然のままに残る景色の景勝地として知られていた。守さんには目の前に広がる大海原には巨大な海上都市郡が群生し、その夜景は絶景であった。

海底都市郡は海底新幹線で結ばれ、本土とは三浦半島で結ばれていた。この新幹線車両は高速交通機関集中試験所の島井始博士のチームが開発した浮遊型リニカモーターカー^{スリーゼロ}でその最高速度は一〇五〇km/hに達していた。列車の形式を〇〇〇系^{スリーゼロ}といい、二〇世紀後半に開通した日本の新幹線〇系^{ゼロ}系からもじつたものである。そういえば、二つの列車は先端部が丸鼻のようなデザインで似ていなくもない。

守さんもこの列車で伊豆・小笠原海溝の発掘現場へかよっていた。発掘自体はもちろん宇宙考古学研究所がおこなうのだが、なにぶん発掘現

場は深海のため海洋科学研究所の協力をあおがなければならなかった。

当時の海洋科学研究所は海上都市ミュにあつた。あつたというよりミュそのものが研究所であった。所長（市長）は元波博士といい、今回海底探査に派遣されたのは劔田チームであった。劔田教授はもともと海洋生物学の専門家だったが、当時、「番号」試作深海探査型潜水艦の開発を指揮していた。空いている深海探査船がなかったため、試験がおわり解体をまっていた番号を使つて遺跡発掘を行うことになった。そのために艦長として劔田教授、そのほかに島井副長、古井機関長らが派遣されてきた。ちなみに、島井副長は先にのべた〇〇〇系リニア新幹線を設計した島井博士のご子息である。オートマチック化が進んでいた潜水艦は発掘スタッフを合わせても十数名程度しか乗組員は必要なかった。この発掘航海を島井副長の回想録「地底潜水艦」に乗組員の名前が数名でているのでここに記しておく。

発掘責任者・三本足進 副責任者・山井重志^{やまいしげし}

一般スタッフ・道野広、浦島次郎、畑恵次郎、高井研、島礼子
アルバイトスタッフ・宇都宮公久^{きみひさ}・梶深雪、足立太、古代守

「わしが、君のおじさんにしこまれたことを全て仕込んでやろう」

と、三本足がいった。やってみるとこの仕事は、知的好奇心がみたさ

れるたのしい労働であった。発掘された遺物を分類したり、時には小型探査艇に乗って海底探査に連れて行ってもらったりした。特に小型探査艇の時には操縦やマニピレーターにも触らせてもらい。ついには発掘チーム一の名人になった。守さんは父の機動重機マグナムD型の開発中に試験運転などを手伝ったりしてこういうメカの操作は得意であった。

「守さんは、やるのう」

と、三本足は毎日ほめた。この博士は無類のほめ上手で、スタッフを毎日ほめてうまく使っていて評判が良かった。特に守さんについては「守さんはすごい、最初は世辞半分ではめていたが、どんどん吸収してお世辞でほめるところがなくなってしまったわ」

と、三本足も舌をまいてしまった。

潜水艦での発掘は数度に行われた。

特に守さんが高校三年の時の夏休みの発掘は最後の締めくくりとして、一ヶ月間もぐりつばなしの航海であった。

この航海は、大発見をとまなう大冒険の旅であった。そのころにはスタッフたちもお互いの気心も知れ、家族のような関係となり、とても楽しい旅でもあった。

山井重志という人は、古修司^{ふるしゅうじ}宇宙考古学研究所長の直接の弟子である。

その出会いは重志が貧乏学生だったころ、トンネル工事のアルバイトをしていたときのことである。

重志はもともと「本の虫」とあだ名されるほどの読書家で、工事中もひまを見つけては読書して工事スタッフのひんしゆくをかうぐらいであった。その工事中に太古の人類の化石を発見した。重志の知識がなければただの石ころと見逃されていたものを世に出したのだ。そのとき調査に古修司が来たのが宇宙考古学に関わるきっかけだった。重志は知識のかたまりで、守さんたちアルバイトの学生にいろいろ教えてくれた。

宇都宮公久は長身の好漢でいつも微笑んでいるような顔をしていた。

2
練馬大学の学生で専門は宇宙考古学でバイトスタッフたちのよき兄貴分として種々の相談にものっていた。守さんも後に進路相談などにのってもらうこととなる。

梶深雪は公久の研究室の後輩で瞳の大きな亜麻色の長い髪の女性だった。守さんはじめ、独身スタッフはひそかな恋心を抱いていたが、公久の彼女と発覚しみんなを落胆させた。のちに二人は無事結婚することとなる。

足立太は、練馬大学大学院工学部の院生で、専門は宇宙船のエンジンだ。宇宙考古学よりも零号そのものに興味がつよく、古井機関長の助手のようになっていた。

遺跡発掘の成果としては、日本海溝のゼスの遺跡と大きく変わらず、ゼスたち分布範囲がひろがっただけであった。ところが三年間の発掘の最後にきて大きな異変がおそった。

「・・・ゴーストサブマリンド探知」

ソナー係の島礼子の声からそれは始まった。

「民間人が乗っている時になんてこつたい」

島井副長の上ずった声がする。乗組員が艦橋に集められた。操縦士の浦島次郎と島礼子は、たがいに声を掛け合いながら番号を操っている。

劔田教授からゴーストサブマリンの説明があつた。要約すると

—— 十年ほど前から国籍不明の潜水艦が世界の海にあらわれるようになった謎の潜水艇のことで、偵察衛星にも探知できず、海底から突然現れ、各国の輸送船を無差別に撃沈し、いずこともなく海底に消えてゆく。本当はどこかの陣営の新兵器ではないかという疑心暗鬼のなかで、あらゆる国がゴーストサブマリンの探索に乗り出したが、高性能深海型潜水艦の前にはゴーストサブマリンはなかなか現れない。何とかゴーストサブマリンの正体をつかまないといけないとやっきになっている時に番号の一〇〇〇m前に現れたというわけだ。

「ゴーストサブマリンの正体の心当たりはないのですか」

三本足がたずねた。

—— 断定はできないが、太平洋合衆国のネオ・ムー帝国特別州があまりやしいと各国政府は考えている

ネオ・ムー帝国（特別州）とは、世界に先がけて、二二二一年に南太平洋にドイツ系ヨーロッパ連合人のイダク博士によって建設された史上初の海上都市がその母体である。その後都市はどんどん増殖し、世界に對し独立を宣言したのが二二二六年。もちろん各国はその独立は承認しなかったが、ネオ・ムー帝国は太平洋における中継貿易でどんどん発展していった。

3 各国は苦々しく思っている、武力によつてネオ・ムー帝国を破壊することもしなかった。第三次世界大戦終結から四半世紀しかたっていない

当時どこの国も戦争アレルギーになっていた。平和主義というやつだ。後知恵になるがこのときに各国が協調してネオ・ムー帝国を武力攻撃しておけば、後にその何倍もの労力をかけることはなかったのだ。まさに、第一次世界大戦後のパリ不戦条約による平和主義がヒトラーのナチスドイツの横暴を見てみぬふりをしたために第二次世界大戦をまねいてしまったのと同じ構図である。

その後、オセアニア合州国との合併交渉を行っていたアメリカ合衆国がその間にあるネオ・ムー帝国を説得して高度な自治（というより独立にちかい）を条件にネオ・ムー帝国特別自治州としてとりこんでしまつ

た。とりこんだといえれば聞こえがよいが、ネオ・ムー帝国側から見れば、独立は保たれ、税金という名のお金で太平洋合州国軍という用心棒をやとったようなものである。各国はネオ・ムー帝国に手を出せなくなり、ネオ・ムー帝国その財力を背景に議会にロビー活動を続け、逆に太平洋合衆国の政治をあやつり勢力をのばした。大西洋にはアトランティス海上州支部、インド洋にもレムリア海上州支部と世界の海に勢力をひろげていった。

ネオ・ムー帝国についての話は続く。

ネオ・ムー帝国の初代総統はイダク博士の妻のバレタラである。プロンドのロングヘアの美人だ。もちろん夫であるイダク博士の傀儡で実権はイダク博士が握っていた。建国当初のネオ・ムー帝国は世界中に敵ばかりだったために、いかつい（実際イダク博士は画像を見るとなかなか強面だ）男性指導者より、女性指導者の方が外交交渉をうまく行えた。

—— 平和を愛する理想の通商国家 ——

というキャッチコピーで建国したネオ・ムー帝国には実際イダク博士よりバレタラの方がふさわしかった。彼女はすぐに世界中のアイドルとなり、移民希望者が殺到した。ただし、その移民の条件はある意味大変厳しかった。

—— 美しく有能な者 ——

つまり美男美女が移民の絶対条件なのである。もちろん、科学者などの特殊な才能を持つ者の容姿は若干考慮されたが

「内面の優秀さは必ず外面にも現れる」

という建前があるため、ある一線以上の美男美女にかぎられた。世界中から人材を高額報酬をエサに集め発展していったネオ・ムー帝国だがこれは大きな足かせとなった。例えば、自殺した神代計画責任者^{かみよ}だった佐渡魚造などは、当時世界最高の宇宙船技術者だと誰もが認めていたが、そのさえない容姿ためネオ・ムー帝国からついに声がかからなかった。

4 もし、ネオ・ムー帝国が佐渡魚造を得ていたなら、ドブプラーが失敗を繰り返した宇宙移民計画は二十年は早まったといわれている。

ただし—— 美男美女のみの理想国家という触れこみは世界中の醜男醜女^{ぶおとしこめ}の猛烈な抗議をうけたのだが、ナルシストたちには受け入れられ、移民希望者はあとをたたず、まことに結構な絵本のような美男美女ばかりの国ができた。

経済発展を続けるネオ・ムー帝国は太平洋合州国だけでなく、金にものをいわせ世界中の国に傀儡政党を作り政治力をまわしていった。古代進の父親であるミル・エスパノスキーが闘っている、スラブ民主共和国連邦を支配しているバシウ党もネオ・ムー帝国の傀儡政党だったとも

つばらのうわさであった。

軍事力はというと、表向きは非武装だったが、強大な潜水艦隊を有し、海底ににらみをきかせているのではないかとの疑惑はあとをたたなかつた。こんな、ネオ・ムー帝国だからゴーストサブマリンの所有国だとうたがわれてもしかたがないところもあつたが、証拠はなかつた。

そのゴーストサブマリンが零号の前方にあらわれたのだ。

民間人を巻き込みたくはないが、ここで追跡して正体を確かめることができたなら世界中の不安がとりのぞける。なんとか覚悟を決めてもらえないか。劔田教授のサンタクロースのような髭の中から静かだが、はっきりした言葉が低く響き渡つた。

一同は顔面蒼白になり静まり返つた。

「オレら素人でも大丈夫ですか？」

関西道出身のメガネで痩身で頭頂の髪のが薄いのが痛々しい高井研がきいた

「島井副長や浦島、島両名は潜水艦の専門家である。追跡は十分可能だ。

また零号はもしものときに備え武装もしてある」

「ほな大丈夫や、ここは世界のためにひと肌ぬごうや」

高井のやや間の抜けた言葉でみんなの腹は決まつた。

零号の方がわずかに優速だったのだが追跡は困難を極めた

「前方八百m、すごいやつです。ほとんど垂直にもぐつていきます」

島井副長の声が響く。ゴーストサブマリンは急降下爆撃機のように伊豆小笠原海溝に穂垂直に潜航していった。

「追尾できるか」と劔田教授がきくと

「平気です。わが零号のほうがやや高性能だと思われませう」

零号も垂直に追跡していった。足立太が

「潜水艦で垂直降下とはおかしな気分だ」

と呟いたら、はげ頭で肥満おじさんの畑が

「昔の潜水艦では考えられないことです」

と答える。

「どこまでもぐるんかね？」

「たぶん伊豆小笠原海溝の底まで……」

「底がなかったら？」

「底のない海なんてないわよ！」

梶深雪が会話に割つてはいつて来た。そのとき島井副長が叫ぶようにつぶやいた

「おかしい、まわりからは海底反応があるのに、降下してゆく真下には反応がない」

深度は二万 m を超えている。

「ここには底がない。ビンの口を通って中へ入ってゆくような気分だ」

島井が報告したとき、礼子が叫んだ

「変です、水圧が下がっています。深度計が海面下百 m をさしています」

「ゴーストサブマリナーが水平に艦をたてなおして浮上しています」

「よしわれわれも浮上しよう」

「攻撃をされませんか」

「攻撃する気ならとっくにしてているさ」

なんとも不思議な光景であった。

二万 m 海底に地底海が広がっていた、その海面はプランクトンのせいか真っ赤に染まっていた。天井は岩石でたたみあげられ、横には天井にとどく柱、番号が入ってきたビンの口がそそりたっていた。

「ゴーストサブマリナーから通信が入っています」

肥満でメガネの道野広の音が響いた。ゴーストサブマリナーの通信をまとめてみるとおおむね以下のとおりである。

——ゴーストサブマリナーは、ネオ・ムー帝国が十年まえに発見した地底海の探査用潜水艦である。地底海は大陸の地下も含め、世界中に張り巡らされている。この地底海を利用すれば、世界中どここの海にも神出

鬼没に現れることができ、ネオ・ムー帝国が世界の海を支配することが

できるのだ。本艦（ネオ・ムー帝国地底海探査船六号）は、乗組員の妻レダが病気のため醜くなり死刑にされ、それに同情するとともに、抗議のため大東亜諸国連合への亡命を希望する

というものだ。劔田教授はだまって考えていた。

ゴーストサブマリナーの正体はわかった。しかし、あまりにも高度な政治的判断が要求される内容であった。数分の沈黙の後

「亡命を受け入れます」

と、劔田教授が決断したのと

「魚雷接近！」

という礼子の声が鳴り響いたのとほとんど同時であった。

「急速潜行、おとり用魚雷発射」

島井副長の反応は一步早かった。ゴーストサブマリナー（探査船六号）

は反応が一瞬遅れたため撃沈されたようだ。

「潜水艦戦はまずい、こちらの方が優速だ。おとり魚雷を撃ちながら逃げよう」

劔田教授は瞬時に判断する。島井副長が反論した。

「敵潜水艦はビンの口、地底海の出口に鎮座しています。逃げ道がありません。」

「ゴースト潜水艦は海底海は世界中の海に広がっていると聞いていた。北を目指して逃げるのだ」

零号は北を目指して逃げた。ビンの口に逃げ込むとたかをくくっていた敵潜水艦は、零号が北上を始めたのであわてて魚雷を撃ちながら追跡を開始した。しかし、時すでに遅く。優速の零号はからくも敵潜水艦を振り切ることに成功した。それから二十数時間

「上方にビンの口、出口らしき反応があります」

零号は浮上を開始した。浮上した場所は、日本近海、日本海溝の、まさにゼスの遺跡のすぐそばだった。

「ゼスもこの海底海を伝って移動していたのかもしれないな」

三本足進がつぶやいたのを守さんは長く覚えていた。

このように足掛け三年におよんだ伊豆小笠原海溝のゼスの海底遺跡発掘調査は終わった。海底海については軍事機密として乗組員全員に緘口令がひかれたのはいうまでもない。

守さんの高校生活はこうしておわろうとしていた。

問題はその後の進路である。守さんの成績では練馬大学本校のどの学部でも進学は可能であったが、守さんはきめかねていた。同じ名前の叔父の後をついで宇宙考古学部も考えた。また、工学部それもロボット工

学を専攻して父親を助けたいという思いもあった。不思議と母親の医学部には関心がわかなかった。悩みに悩んだ末、宇都宮公久に相談した。

「工学にはそんなに興味があるのかい？」

「父の影響か、小さいときから機械いじりは好きでした」

「宇宙考古学とどちらが好きなのだい？」

「宇宙考古学は叔父の影響で昔から興味がありました。高校時代に発掘スタツフになって、正直これもいいかな、と考えました。ただ・・・」

「ただ・・・？」

「今回の海底海の発見で、海底海を探索したいという気持ちと同時に・・・」

「同時に・・・？」

「なんか、人間同士の争いがいやになりました」

「戦いが怖いか」

「それもありませんが、それより、人間同士の争いで貴重な海底海が汚されるのを見たくないというか。それに、海底海自体の発掘では日本海溝や伊豆小笠原海溝の遺跡と大きく変わらないのではとも思いました」

「ではどこを調査したいのかな？」

「宇宙です。ゼスの子孫を探索したいです」

「宇宙といっても、現在の科学力では太陽系の探査が限界だ。太陽系内ならば、新たな遺跡といってもガニメデ遺跡やエウロパ遺跡と変わらな

いのではないかな」

「恒星間宇宙船がないとダメか……」

「なんだ、もう進路は決めているじゃないか」

「え？」

「一番したいことは恒星間宇宙の調査だ」

「そうですけれど、それは恒星間宇宙船がないから不可能です」

「なければどうすれば良いのさ??」

「なければ……あ」

守さんは立ち上がって叫んだ

「なければ造ればいいんだ。自分でつくれば!」

守さんは、目の前の霧が真っ青に晴れ渡るような気分になった。

十七になった守さんは、練馬工業大学工学部宇宙船工学科に進学した。

守さんを含む練馬大学工学部宇宙船工学科の二二八四年度生はまことにもって大豊作というほかない。たった十六人の学生の中に後の銀河一〇〇年戦争で活躍する多くの兵器の開発者として名を残すものがきらぼしのように在籍していた。例えば

大山歳郎、真田士郎、平賀一臣、新井伴太、島統悟、鳥野始、機場賢悟

朝永某……。主なものだけでもこの数である。このことは、守さん

にとつて幸運だったかどうかはわからないが、地球にとつては大きな幸運だったと後にわかることとなる。

古代守は、特に大山歳郎と真田士郎と気が合った。後に零式宇宙戦闘機を開発する鳥野の回想録では、三人で飲んでいるところをよく見たという。特に、普段は無表情さから「サイボーグ真田」と陰口を言われていた真田士郎が、この二人にと話しているときだけに笑顔を見せていたのは印象的であったという。

8
真田士郎は、大東亜諸国連合内では、プロメテ計画の大江戸博士と並ぶ宇宙船工学の権威、真田佐助博士のお孫さんで、いここにはアレサのメッセージを受けた大東亜諸国連合科学技術省技官の伊賀歳三がいる。

兄弟は姉が一人いたが、月のテーマパークで事故にあい亡くなっている。そのときの経験が彼を無表情に変えたようである。

大山歳郎も家庭には恵まれていなかった。兄弟は多く、妹三人と弟一人の五人兄弟だが、父親をはやくに無くし、病気がちの母親は幼い子供を一人で五人は育てられないと、子供たちを親類に預けた。男女に分かれて預けられ、妹二人は母の実家の胎宮家に預けられ、歳郎は弟の大と共に父の妹の嫁ぎ先である前野家に預けられた。兄弟はそれぞれさびしい思いでそだった、母親もさびしさに耐え切れず土田某という者と再婚した。いわば、子供たちは母親に捨てられたわけだ。その後も母親

の心身は回復せずちょうど五十歳で他界した。それでも、歳郎は明るく、好奇心旺盛で、何にでも興味を持ち、面白そうなことにはなんにでも首を突っ込まずにはいられない性格にそだっていた。

同じ不幸な過去を持っていても明るく振舞うと歳郎や、天性の朗らかさというか人間の魅力を備えた守さんらと接するうちに真田士郎も人間的な感じが出てきたのかもしれない。

三人の夢がなんとなく一致したのも仲が良かった理由だろうか。三人とも恒星間飛行宇宙船を開発する事を夢見ていた。

守さんも他の学生も最新のエンジンの学習をした。しかし、それぞれの得意分野があった。例えば島統悟などは、細かいメカ作りが得意であった。ちなみに島統悟は、番号の乗組員の島礼子の弟である。

こうして大学生活が一年たち二年たつうちに守さんの態度が変わってきた、ひとり考えこむことが多くなった。士郎などが心配して声をかけても

「なんでもない」

というだけであった。

—— 宇宙における人間の生と死 ——

という書物がある。

今となつては古典的な宇宙論だが、その高度に文学的な文章は当時の若者たちを宇宙にかりたてた。事実、大山歳郎や真田士郎を初め、守さんの同窓生の多くが愛読した。

作者は、沖田十三という物理学者である。この人は宇宙物理学の研究だけではあきたらず、自ら宇宙飛行士に志願して、大東亜諸国連合、いや地球を代表する宇宙飛行士のひとりになっていた。その豊富な知識と経験を基にした宇宙論には、現在読んでみても息をのむ銘文である。

沖田十三は銀河一〇〇年戦争では、宇宙戦艦大和の初代艦長ヤマトに就任し、その後第七艦隊を率いてイスカンダルへの初の星雲間航行を成功させることとなるが、ここでは詳しくふれない。

守さんも「宇宙における人間の生と死」は愛読していた。

他の仲間達と違うのは、沖田十三を昔から知っていたことだ。父方の親戚にあたり、父親の武夫とは従兄弟同士の間柄である。

—— 沖田のオジサン。

と、子供たちは呼び、むかしからよく家にあそびにきていた。特に守さんがかわいがつてくれた。

大学に入学して二年が過ぎた頃、三浦半島に里帰りして大通りを上の空であるいていた守さんを、「沖田のオジサン」が呼びとめた。

「ひさしぶりだな」

と、この著名な物理学者は声をかけた。

天王星探査を終えて久しぶりに地球に帰ってきたところである。

「うかぬ顔をしているな、どうした」

というやいなや。

「立ち話はいかん」

と、オジサンはあたりを物色した。真剣な話は立ち話ではできない。

という生真面目さである。物色すると喫茶店の野外テラスがあつたので腰をおろしコーヒーを二つたのんだ。

「どうしたというのだ」

と、オジサンがいった。守さんが「なんのことです」というと

「小さいころからお前を知っているがそんな顔は見たことがない。どうせ親にもいえん悩みだろ。将来の進路かなにかであろう」

と、ズバリ本質をついてきた。守さんは子供のころからの親しみと、

久しぶりの懐かしさから胸の内を曝りはじめた。沖田十三の人格的安心

感に浸ってしまったせいかも知れない。

守さんのなやみはこうだ。

自分は恒星間探査を志している。そのための宇宙船開発のために練馬
大学に進学した。ところが入学してみると、大山歳郎や真田士郎のよう

な天才としか言いようの人物がこの世に存在することを知った。これで

は自分の出る幕はない。自分はむしろ開発された宇宙船に乗る。宇宙飛行士を目指したほうが良いのではないかと、針路変更を考えているというのだ。

宇宙飛行士

という職業は二十二世紀後半の当時でも選ばれた人間の職業であった。

いやむしろ二十二世紀初頭の各国が宇宙開発に力を入れ始めた頃の方が宇宙飛行士不足で簡易になれたであろう。宇宙飛行士が飽和状態になるにつれ、一つの分野で実績を残すなりした者が希望して数十倍の難関を勝ち抜いてやつとなるものであった。守さんのような一介の学生にはまだまだ高嶺の花的な職業と世間では言われていた。

10

「守は知らんのかな」

と、オジサンはいった。守さんはコーヒーをすすりながら

「なにをですか」

ときくと

「宇宙戦士訓練学校というものができると、これは宇宙軍の兵隊を育てる学校で卒業後何年かは宇宙軍にのこらねばならんがな」

と容易ならぬことをいった。

「宇宙軍？」

「詳しくは軍事機密になるので言えませんが、例のテレサのメッセージ対策で宇宙軍をつくることになったのだ。」

「宇宙人との戦争ですか。」

と守さんが問いなおすと、

「表むきはな、ここからは他言無用だが、火星などの植民星の独立対策も関係しているのだ。今年からは宇宙艦隊建設も始まるそうだ」

「軍人・・・ですか。」

守さんが躊躇していると

「軍人はいやか。そこがつけめだ。軍人ということではなかなか生徒が集まりにくいそうだが、いっばしの宇宙飛行士の訓練はうけさせてくれる。なに、宇宙戦争などそうそうおこるものではない。何なら資料をとりよせてみたらどうだ」

沖田のオジサンはたちあがった。

守さんは

「考えたこともないな。」

と、つぶやいた。できれば技術者か学者になりたいと思つて勉強してきた。それがいきなり鼻先で軍人になるかと問われて即答できるわけがない。

11

ネットで調べてみたが、たしかに宇宙飛行士にはなれそうである。それどころか今現在の守さんにとって宇宙飛行士への最短コースのように思えた。

「宇宙戦士訓練学校を受けるだ」と。

と真田をはじめ大学の仲間が驚きながらいった。

「よせ、筋の通った人間のゆくところじゃない。」

「はあ」

守さんは、わざとにぶい顔をしていると、さわざをききつけた、無政府主義者キリストの上級生がきて

「軍人など自由がなく、国家に利用されるだけのつまらん仕事だぞ。」

「しかし、宇宙飛行士になれます。」

「宇宙飛行士になるためなら、わが身を売りさばくという事か。」

守さんはしばらくだまつたあと

「貴方あなたさんは、お覚悟があつて右のごとき暴言をはかれたのかな」

と、しずかにいった。

「ひとをゆえなくのしりなさる以上、命をおかけになつておられるのでしょうか。ちよつと表にでましようか。」

相手は、真つ蒼になった。

このはなしには、あとがある。

上級生は本庄恒雄という大学院の学生だったが、根は臆病な男らしい。

やにわに右肩をあげた。

「それが、先輩という言葉か」

と凄んでみせたが、病犬のように激しく息をしている。守さんはうつむいたたま黙殺した。相手が飛びかかってくれば、死んだ気になってたかかってやるつもりだったが。

が、本庄はいなくなっていた。

守さんは手持無沙汰になった。やがて知った顔があまりにきた。足立太である。本庄は震え上がって反省しているとのこと、自分の顔に免じて許してやって欲しいとのことだ。守さんがうなずくと本庄が詫びをいれにきてこの話は終わった。

テレサのメッセージから六年、各国では少しずつ宇宙軍がきつつあったが、宇宙飛行士が絶対的に不足していた。大東亜諸国連合にも宇宙戦士訓練学校というものが出来たのが二二八五年である。

古代守がもしこの学校に合格するとなれば第二期生ということになる。「場所は、南部海上都市の宇宙開発地区の中だよ。大きなスペーススタワーが目印だ」

と教えられてきた。

みちみち、

—— 宇宙戦士訓練学校はどこです。

ときいても、たいていはさあね、と首をふるばかりで知らなかったが、スペーススタワーといえはすぐ答えてくれた。南部海上都市は、南部重工業の宇宙開発都市で、官民一体の宇宙開発拠点であった。

全高一七七八mのスペーススタワーを見上げながら階段を登ってゆくと、にわかに三十階建ての高層ビルがある。

12
衛門があり、そこで来意をつけると、兵隊が案内してくれた。校庭はひろく、ビルの中は各種機械や操作パネルが見え、巨大な宇宙船のようであった。

事務室に入らされた。

軍曹が出てきて、

「履歴書はあるか」

と、きかれたので、提出すると、軍曹はそれをしばらく眺めたあと願書の書式を教えた。

奥のほうに士官がいた。面長で目がするどくあの張った男で、近づいてきて、

「おまえは陸海空どこの軍かな」

といった。大尉である。

(これが、宇宙軍の士官服か)

と、守はうまれてはじめて士官というものの実物を見た。あとで知ったことだが、神宮寺武士じんくうじたけしといい、空軍あがりの士官で、生徒司令副官という役目をつとめていた。

「軍人以外で受験するとは貴重なやつだ。試験は、簡単な学科試験と体力テストと小論文と面接じゃ。練馬大学出身なら学科は問題なからう。体格もええから、体力テストもなんとかなるだろ。後は小論文と面接だが、軍人になるからには、少しくらい軍隊のことも勉強しておけ」と、大尉はいった。

守はおどろいた。軍隊というものについて、いままで一度も習ったり考えたことはない。学科や体力には多少の自信があった。それを話すと、「軍人以外にも少しは別枠があるだろうからな」

と、この大尉はひどくおどろかされたことをいった。要するに、基本的には軍人の中から宇宙戦士を養成するのが主流だが、それ以外のなかからも少しは新しい血を入れたいと、よさそうなものがあれば合格させようというものであるらしい。

試験の日は風のつよい日だった。

守は定刻の八時前に宇宙船氏訓練学校校庭にゆくと、すでに応募者二

千人ほどがあつまっていた。大方が陸海空軍人らしく、所属たむごとに屯ろしていた

「採るのは五百人ぐらいだろう。従兄いとこがそう言っていた」

と、仲間同士で話している。

(五百人も採るのなら、わしでも何とかかな)

もともと根が楽観的な守は少し安堵した。まあ、ダメなときはダメなときだと思い、おにぎりを食べていた。朝が早かったので来る途中にコンビニで買ってきたものである。

試験がはじまった。

13
学科試験は難なくこなし、体力テストも。軍事教練的なものに多少とまどったが、自分としてはなんとかこなせたと思う。問題の小論文が始まった。

正面に、題が貼りだされている。

「宇宙船の戦闘について論じよ」

というのが題であった。

守は、なんのことかわからない。宇宙船同士の戦闘など聞いたこともない。(実際、当時は小規模な宇宙海賊の取り締まりくりしか戦闘もなかった。)

宇宙船とは宇宙を飛行する兵器だから飛行機みたいなものであろう。

大型飛行機の空中戦のようなものではないかというイメージが、当時の軍隊内部での主流であった。

が、守は知らない。

(宇宙船というからには、船みたいなものである)

しかし、宇宙には上下左右がないはずだから、上下左右に動ける船、潜水艦をイメージしたら良いのではないか。そうだと思います、そう思うと急に勢いが出てきて書き始めた。

「自分は、かつて潜水艦で海底遺跡の発掘をしていたときがあります。

深海は光が届かずまるで宇宙を航行しているようでした」

というところから書きはじめ、ゴーストサブマリンとの戦闘の経験などもまじえながら、守さんなりの宇宙船同士の戦闘を描写した。

とにかく時間いっぱい書き上げ、面接も難なくこなし皇帝に出てみると、他の受験生連中の話を聴くとはなしにきいていると

——— 宇宙船は潜水艦ではなく飛行機であるそうである。

(軍人以外は来るなということかな)

この出題から考えればそうであろう。ある種の軍事的教育をうけていないとわからない。あるいは出題者は、世の中に軍人以外の人種がいることを想像できないいひとかも知れない。

14

ところが、十日ほどして、宇宙戦士訓練学校から通知があり守さんは合格した。

新入生説明会では合格者一人ひとりに適正面接があった。守の面接官は神宮寺武士大尉で、その時宇宙戦士訓練学校の詳しい説明をうけた。

「練馬大学中退の古代守だな」

神宮寺はつづけてたずねた

「兵科は、なにを選ぶかね」

「なにになにがあるのですか」

と、守さんはきいた。なにも知らなかった。

「宇宙艦艇運用科、宇宙攻撃科、宇宙工兵科と、今年から新設された空間騎兵科だ」

「自分はなににむいていると思いますか」

守さんは逆にききかえた。

神宮寺は、守さんの経歴。宇宙船工学科中退という宇宙船設計を学んでいた経歴から地上降下作戦や、宇宙ステーションへの乗り込み用の宇宙船など考案してくれたらと思

「空間騎兵科はどうだ」といった

「空間騎兵科とはなんですか」

「宇宙の陸軍部隊だ。もともと兵隊ではなく、部隊を運用する宇宙船のノウハウの研究だな」

つまり、宇宙船から上陸部隊などを支援したりする兵科ということだ。

守さんは、宇宙探査で未知の惑星に進出する時に役立つと即座に判断し

「自分は空閑騎兵にします」

と古代守がいったことが、地球の運命のある部分を決定づけたことになるのである。

神宮寺は、宇宙船を潜水艦にたとえたユニークな論文を思い出し

「これは案外ひろいものかもしれない」

とつぶやいた。

第四話 了

次回第五話 「七番長」